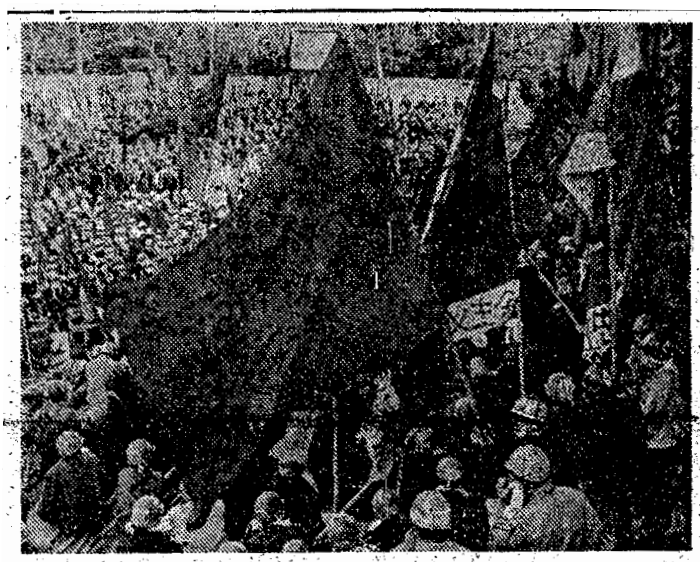
1969.12.25 明治大学新聞

全国全共闘大会開く

19日 日比谷野音に三千人

九月五日に結成された「全国全共闘連合」は、十二月十九日午後一時から日比谷野外音楽堂で「第二回大会」を開催した。



当初開かれる予定であった、慶応大学三田校舎が大学当局のロック・アウトにより実施不可能となったため、日比谷野音に急拠変更された。

当日の参加者は第一回の結成大会をはるかに下回る約三〇〇〇人程度であった。

開会宣言に続いて、各大学全共闘の連帯の挨拶があり、本学からは本間晟豪君（二文四年）が登壇し連帯表明を行なった。

その後、各党派の代表（ブントプロ学同、学生インター、反帝学評、フロント、解放戦線、中核、全国反戦青年委代表）から、首相訪米阻止闘争の総括と今後の展望決意表明がなされた。

九・五結成以来、一〇・二二国際反戦デー、十一月首相訪米阻止闘争を闘かってきた全国全共闘内部の八党派では、その総括に幾分の差違が認められた。中核、ML派は「警官を総動員して戒厳令体制で臨んだにもかかわらず、首相が羽田までヘリコプターを利用せざるを得なかったところまで追いつめた」として〝勝利〟の総括をすれば、反帝学評、プロ学同などは〝敗北〟の総括として、「羽田空港に一歩も近づくことができず首相の訪米を阻止できなかった」とはっきり認めている。

また、中核派と反帝学評がこの日の大会で激しく対立、内ゲバを演じ、ノンセクトを失望させ、煩悶させる姿をみせつけた。

大会終了の後、幹部の逮捕などのため一部執行委員の変更の発表がなされた。

日比谷野外音楽堂に三〇〇〇名を集めて開かれた第二回全国全共闘大会